F－6　第6報　仙台市居住者における老化現象の性別・年令別比較

代表者　後藤たへ　○上崎武男

目的　仙台市居住の満65才～70才の214名を対象として、生活の実態を調査し性別，年令別に分類してそれぞれ老化度と項目評点を求めた。

方法　第2報および第3報の方法に準じて行った。

結果　1．全標本については、総合老化度と外見老化度において有意差がみられ女性のほうが老化度が高かった。年令間では外見上老化度に有意差があらわれた。

2．男性グループの年令間には有意差が見られなかったが、女性グループでは総合老化度において年令間に有意差が見られた。

3．年令ごと性別においては、外見上老化度で66才，69－70才の男女間に有意差がみられ女性のほうが高かった。

4．調査項目の平均点を求めて全標本と男女グループ別で比較すると，機能老化度では「夜間頻尿」，外見老化度では「皮膚」「歯」，精神意識老化度では「役割（外）」「趣味」「物忘れ」などの項目の平均点が高かった。なお年令ごと性別および年令増にともなう項目平均点の増減についても検討を加えた。

なおこの研究は宮城学院女大，宮城教大，尚絅短大，仙台白百合短大の研究員の共同研究によるものである。